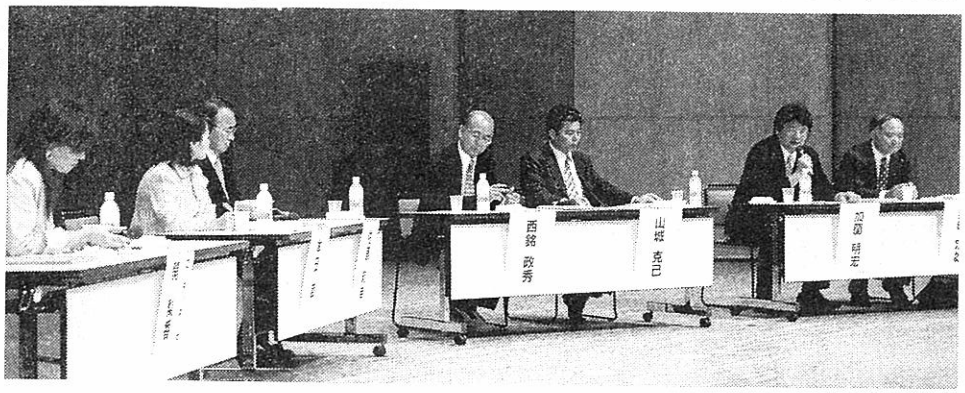
琉球新報　2007年（平成19年）4月3日　火曜日

聖地祈り

歴史・文化・自然が資源



南城市の観光について議論を交わしたシンポジウム＝3月29日、南城市文化センター・シュガーホール

南城ツーリズム構築へシンポ

【南城】シンポジウム「いよいよ発進！南城ツーリズム」（南城市主催）が三月二十九日、南城市文化センター・シュガーホールで開催された。基調講演、パネルディスカッションなどが行われ、南城市らしい観光の在り方について議論が交わされた。パネルディスカッションに先立ち、国土交通省地域振興アドバイザーで、熊本県人吉市で郷土料理伝承塾を主宰している本田節さんが「体験・交流型ツーリズムを通じたまちづくり」と題して人吉市のグリーンツーリズムの実践を基調講演した。

先進地事例も紹介

「南城のツーリズムを考える」をテーマにしたパネルディスカッションでは本田さん、東村ふるさと振興株式会社の山城定雄専務、修学旅行向けの体験学習の受け入れを行っている「ニライカナイ」の加蘭明宏代表、伊江村観光協会の山城克己会長、西銘政秀久高区長、南城市地域再生マネージャーの佐藤和幸さんが活発に意見を交わした。コーディネーターは「開」の開梨香代表が務めた。

東村の山城専務は「一九七七年から六年かけてつつじ公園を造ったが、行政は音頭取りで実際に作ったのは小学生からお年寄りまで住民。今年もボランティアの手によって祭りの会場ができた」と住民主体の必要性を説いた。

佐藤さんは「聖地、自然の中で祈るということに新鮮な驚きを感じた。人工物がないところが日本にもあったのかと思った」と外の目から見た南城市の魅力を話した。

久高島の観光の先頭に立ってきた西銘区長は「久高は神事が多く、神事と観光の兼ね合いが大変。歴史や文化を無視して観光は成り立たない」と歴史、文化、環境を保全した上での観光が大切とした。

加蘭代表は「ほかの地域と情報交換をしながら沖縄全体の観光を考えてほしい」と注文。伊江村の山城会長は「東村や恩納村、伊江島のまねをしてもかなわない。自分の住んでいるところを見直し南城市ならではの癒やしのまちをつくってほしい」と提言した。

本田さんは南城市のツーリズムは「チャレンジ、チャンス、チェンジの三つのCだ」として「市が目指す歴史遺産と統合医療のコラボレーションに挑戦する。それは町村合併による広域連携ツーリズムの好機。そして住民一人一人の地域づくりへの意識変革が必要」とまとめた。

おいしいね！地元の味と心

体験メニュー大満足

南城市で交流ツアー

【南城】体験・滞在・交流をキーワードに地域ぐるみの観光活性化に取り組む市の「モニターツアー」が十、十一の両日、市知念の体験交流センターを主会場に行われた。

食材を自ら地元で調達する料理体験や「毛あしび」など体験・交流メニューを組んだ二種類のツアーに、県内外からの応募者各六人の計十二人が参加した。

モニターツアーは、国・県補助の体験滞在交流促進事業の一つ「観光コーディネーター養成コース」の実践講習。受講生が企画立案し、ガイドの手配や接客などのまとめ役を務めた。

第一コースでは地元食材を使った料理体験があり、参加者が市内の直売店を巡って地場野菜を調達。体験交流センターの調理場で住民の手ほどきでゴーヤーやナーベラーを刻んでチャンプルーにしたほか、シマラッキョウとモズクの天ぷらなど計七品を作った。足テビチも振る舞われ、屋外で料理と交流を楽しんだ。

二つ目のコースは、浜辺で貝殻や漂流物を拾う「ビーチコーミング」を企画。天候の関係で当初計画したコマカ島へは渡れなかったが、体験交流センター近くの海岸を散策、持ち帰った貝殻やサンゴのかけらでアクセサリー作りをした。

東京から夫、子どもと三人で参加した会社員の吉川一美さん(三七)は「買い出しや料理で地元の人と話す機会が持てて良かった。ものの見方が広がり有意義な体験だった」と感想。神戸市出身で糸満市在住の会社員、藤原奈央子さん(三六)は「浜辺を歩いて自分をゆっくりと考える時間が持てた。人の温かな気持ちと自然にある物でもてなしてもらったのがうれしかった」と話した。

地元住民に教わり地場野菜を料理するモニター(右)＝南城市知念・体験交流センター